

氏 名	張 影
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	甲 第 34 号
学位授与日	令和 5 年 3 月 12 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	アジア初の長編アニメーション『鉄扇公主』に対する再考 租界都市上海と川喜多長政を通して
審査委員	主査 女子美術大学大学院教授 杉 田 敦 副査 女子美術大学大学院教授 前 田 基 成 副査 女子美術大学大学院講師 栗 田 大 輔

内 容 の 要 旨

本論は、日中戦争下の租界上海の特殊な社会環境や、川喜多長政という映画人の存在が、『鉄扇公主』の制作背景や意図、性質などにどのような影響を与えたのかを考察するものである。

中国のアニメーション作家、万(ワン)籟(ライ)鳴(ミン)、万(ワン)古(グウ)蟾(チャン)による『鉄扇公主』(1941、85 分)は、日中戦争時の所謂「孤島期」(1937 年 11 月－1941 年 12 月)に制作されたアジア初めての長編アニメーションであり、アニメーション史において重要な位置を占めている。戦時下に完成された作品として中国と日本の研究者の注目を集めており、両国の立場の違いはあるものの、共通してみられるのは、抗日プロパガンダという性格である。しかし、この作品については、民国期の上海社会と密接に関係していたことにも注意を向ける必要があると思われる。また、「放任政策」を採ったとされる、制作者、川喜多長政についても、その性格や考え方をもう少し慎重に検討してみる必要があるだろう。

民国期の上海は、租界に象徴される不均衡な社会構造を内包していることに加えて、多層的な社会構造を持ち、階層ごとに、生活や文化、考え方にも明確な差異があった。また、当時の上海は、日本軍や大道政府、南京維新政府などの傀儡政府だけでなく、共同租界やフランス租界の行政機構、さらには中国国内の国民党と共産党の対立、出身地等による差別など、さまざまな対立軸が混在する状況だった。このような政治的な分断や、階層化された社会という特殊性を考慮すると、上海における抗日意識が、実はさまざまな思惑が入り混じった様相を呈したものであったことが推察される。もちろん、抗日プロパガンダという性質を無視

することはできないが、それだけでなく、租界政府や特権階級に対する不満や反発による、反植民地主義や反特権階級という考え方が熟成されていたこともまた無視できないのである。こうした傾向は、当時の風刺画や、上海の方言にも見出すことができる。それらの多くは日本を対象としたものだが、それ以外にも、特権階級や租界の治外法権に対する風刺や批判を意図するものも決して少なくないのである。そこには、日本軍や租界政府、そして、中国の特権階級の抑圧に抗しようとする批判精神の表れを見ることができるだろう。こうした性質は、当時の上海文化に織り込まれた重要な特徴である。『鉄扇公主』においても、物語の構造やキャラクター間の関係に、そうした性質を見出すことは可能なのである。

一方、孤島期という特殊な時期に誕生した『鉄扇公主』を考察する際には、当時の上海映画界特有の環境と、そこに深く関わっていた川喜多長政の活動を検討していく必要がある。日本の国策とは相容れない、川喜多の映画制作に干渉しない方針は、「放任政策」と言われるものだが、その方針は、『鉄扇公主』のように抗日プロパガンダの意図を隠喩的に表現した映画制作を可能にしたものと考えられてきた。先行研究の多くは、彼の方針を、意図的なものというよりも、無責任な姿勢として捉えている。彼のそうした姿勢は、より深い文化や人間に対する信頼に根差したものである。川喜多は、父、川喜多大治郎の影響や、若い頃の留学経験を通じて、また、中国の映画プロデューサー張善琨など、さまざまな人々との関わりの中で、異文化や人間への尊敬の念を育んでいる。また、東和商事を設立して映画の輸出入を積極的に行い、外国の監督との共同制作を行うなど、映画を通じた異なる文化の相互理解の促進に尽力している。つまり彼にとっては、政治や国家政策に直接に関与すること以上に、人や文化を信じるのが、結果として社会そのものに対して影響を与えることができるという信念があったのではないかと思われるのだ。当時、日本の映画産業は、種々の制約を受けていた。川喜多はそれをきらい、上海映画界に、より自由な環境を実現しようと考えていたのではないだろうか。

本論では、以上のような観点から、『鉄扇公主』の再考を試みていく。租界都市上海には、その多層的な社会構造と複雑な政治的背景から、日本の侵略に対する抵抗意識はもちろんのこと、反植民地主義や反特権階級といった考え方も存在し、それらは、上海文化の特徴のひとつである批判精神を表していたと思われる。こうした多面的な思惑が『鉄扇公主』に表象されていた可能性は無視できないだろう。上海の批判精神の根底にあるものは、そこに住む市民によって行われていた様々な地方自治活動と深く関わっている。とりわけ、民国期の地方自治活動に参加することは、階層ごとの日人々の日常生活の一部となり、個人や市民としての権利意識の形成や、そうした権利を奪うものに対する不満、反発という姿勢を生み出して行った。このような意識は、民国期のおよそ30余年を経て、その末期である1940年代になると、すでに上海の文化や、人々の考え方の一部となっていたようである。地方自治意識や市民意識を包含する上海の批判精神は、上海の人々の民主的で合理的な思考を特徴づけるものであったと言えるだろう。その意味で、『鉄扇公主』の意図を再検討すると、とりわけ、「反抗」という姿勢には、抗日意識を超えるものとして、長い年月をかけて地方自治意識や

市民意識が浸透していた上海社会に特有の、不平等や覇権主義に対する風刺や、批判精神を読み取ることができる。

一方、川喜多の文化や人を重んじる姿勢の根底には、彼の文化至上主義が反映していることを見出すことができる。日本占領時期の上海映画界に対する川喜多の支援のあり方を見ると、彼が、上海映画人たちと相互に信頼関係を築きながら、日本軍の強制や検閲に極力抵抗し、プロパガンダ的な要素を回避しつつ、中国人の抑圧された感情に深い共感を示していることがわかる。そして、文化的、芸術的に優れた映画作品を大量に制作することに尽力しているのである。『鉄扇公主』が日本で公開された際には、中華電影が提供した作品として、川喜多の文化至上主義の影響を受けていることを見出すことができる。当時の新聞や雑誌などの資料を見ると、『鉄扇公主』に関する記事は、映画の制作手法や技術、物語など、作品そのものに焦点が当てられていることが確認できる。この映画が伝える内容は国策プロパガンダの性質を超えて、文化的および芸術的な性質を重視する傾向が強かったのである。また、戦時下で公開された『鉄扇公主』という作品は、軍国主義によって抑圧されてきた日本の社会や映画界、そして文化界などに、長い間感じることのなかった芸術の自由や、異国文化の魅力をも与えることとなったのである。

本論の考察によって、『鉄扇公主』は単なる一枚板のプロパガンダ作品ではなく、多層的な批判精神を表象するものであったことが提示され、ひとつの時代精神を示す文化的な性質に光が当てられるようになるはずである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

張影さんの学位申請論文『アジア初の長編アニメーション『鉄扇公主』に対する再考 租界都市上海と川喜多長政を通して』は、先行研究の多くが、アジア初の本格的長編アニメーションとしての成果を認めつつも、その内容を抗日プロパガンダとして捉えてきたことに対し、より深い文化的な意味を見出そうとする意欲的な研究である。抗日という意図そのものを否定するのではなく、租界都市、上海という特殊な文化環境が育ててきた反抗精神の表れではないかと捉え直そうとする取り組みは、抗日と文化的意義を両立させる、独自のものとして高く評価することができる。

上海の反抗的精神に関しては、社会運動やアニメーションそのものに関してはもちろんだが、風刺画から方言まで、アニメーション以外の文化的表象まで視野に入れて丁寧に検討しており、一次資料を積み上げ、実証的な裏付けを見出そうとする地道な作業は高く評価することができる。考察の結果として、一種のプロパガンダとして捉えられてきた『鉄扇公主』を、より広範な時代精神を表すものとして捉え直す可能性が開かれ、本来、作品が湛えていたはずの意味や意義を、削ぎ落としすることなく、蘇らせることに成功している。

また、考察の過程で、戦時下の上海という特殊な環境を丁寧に考察したことも評価できる。

租界や日本軍のみならず、中国人社会の格差、地域格差、そして政治的対立などを確認することで、抗日という対立構造は外せないとしても、種々の抑圧構造があったことが明らかになり、反抗精神の向かう先が、必ずしも抗日だけに集中していたのではないという状況が、説得力を持って提示されている。

一方、これまで、芸術文化を擁護する主体として、その重要性を確立してきたとは言えない映画人、川喜多長政を、その生い立ちまで遡って検討していることも本研究の主軸のひとつである。彼の文化や人間に対する尊敬の念を見つめることで、どちらかというとな責任な場当たり主義とも受け取れる「放任」という言葉で形容されてきた、戦時下の彼の上海での映画制作における「放任政策」を、文化や人を尊重するが故のものとして、再定義したことの意味は小さくない。

さらには、ともすると中国制作のアニメーションと、その日本での上映ということで、当事者である日中両国の状況に集中しがちな研究を、アーノルド・ファンクやゲルトルート・ヴォルフゾーン、ジョゼフ・フォン・スタインバーグなど、ドイツやアメリカの映画関係者との関連のなかで捉えようとした姿勢も、先行研究にはみられないものである。そのような人々との川喜多の共同作業については、今後の更に研究を充実していくことが望まれるが、これまでにない視点の導入は、本研究のみならず、新たな研究領域を開いたものとしても評価することができる。

以上、研究内容に加え、その背景についても簡単に触れておく。『鉄扇公主』はディズニーの『白雪姫』に匹敵する、アニメーション草創期における長編アニメーションであり、技術的にも高く評価されてきたが、その表象の意図は政治的なものとして矮小化されてきた。しかし、そうした指摘を日本側から行うことは困難であり、またそうした指摘は、中国の研究者にとっても受け入れ難いものである。このような状況を打開する手がかりはなかなか得られなかったが、本研究では、そうした両国の事情を踏まえ、政治的意図に関しても全否定することなく、より広大なパースペクティブの中で、作品の意義や意味を捉え直そうとしている。こうした姿勢は、ポスト・コロニアリズム研究などの中で検討されてきたものであり、ある社会環境における芸術表象を考察する上で、今後ますます重要になっていくと思われる姿勢である。

最後に、博士論文そのものに具体的に反映されているものではないが、一次資料の調査などの文献調査に加え、研究過程における取り組みについても紹介しておく。研究に着手した初期の段階で、『鉄扇公主』の上映会を企画し、当時の日本のプロパガンダ・アニメーション、横山隆一の『フクちゃんの潜水艦』を同時上映し、比較検討し、参加者の意見調査を行っている。あからさまなプロパガンダであることが認められる『フクちゃんの潜水艦』と比較することで、『鉄扇公主』を単なる抗日プロパガンダとして捉えることに対する疑義がより明確になったのではないと思われる。人文系の論文においては、一次資料の検討を積み重ねても、どうしても仮説を提起する際には、独りよがりなものになりがちであるが、こうした主観的な判断に関わる部分についても実証性を得ようとした張さんの研究姿勢は、研

究者としての資質を示すものでもある。